

# 今こそ仏文へ

野崎 歓



Bonjour！ さっそくですが、自己紹介をさせてください。ぼくは07年春から仏文で教えています。自分が卒業した場所に戻ってきたわけです。大学教師になってはや17年、これまでは一度も、文学部で教えたことはありませんでした。だから逆に、今の世の中で、文学部が外からどう見えているかはよくわかっているつもりです。また、「仏文」「独文」といった国別、縦割り式研究が何だか時代遅れだと思われていて、かつての人氣が衰えてきたということも。そんな今こそ、ぼくは国別、縦割り式の大切さをアピールしたいのです。



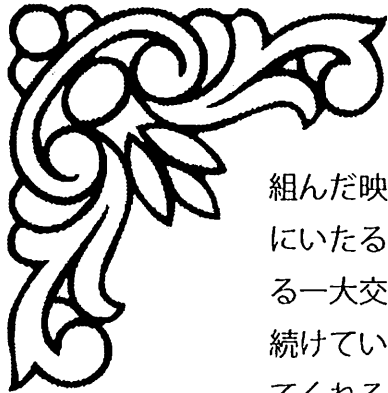
最初にいた一橋大学では、10数年前に言語社会研究科という大学院ができて、そこに配属されました。そのとき言い渡されたのは「これからは非言語をやってくれ」ということでした。なにしろフランス文学一筋で、留学までして一生懸命やってきたのに、「非言語」をやれ、というのですから衝撃です。具体的には、映像文化論を受け持ってほしいということでした。映画は趣味で見っていたし、映画関係の文章もぼちぼち書いていましたが、まさかそれが「本業」になるとは。

ついで東大・駒場の言語情報に移りました。ここでは翻訳論をやってくれといわれました。たしかに翻訳大好き人間で、暇さえあれば翻訳に精を出してきましたが、

「翻訳論」の授業なんか受けたこともありません。さて、どうしたものか。

このような、ぼくがたどってきたコースは、近年わが国の大学における人文学部門に生じた大変動をまさに反映したものでした。でも、その変動をなんとか生き抜いてこられたのは、ぼくの場合、仏文時代に培ったフランス語読解力と、知的好奇心だったという確信があります。





つまり人文系のテーマに関しては、どんな領域、対象と取り組むのであれ、フランス語をキー言語としているということは必ず、武器になります。ぼくが取り組んだ映画や翻訳論の場合がまさにそうだったわけですが、近年にいたるまで、フランスは何ととっても、世界の文化がクロスする一大交差点であり、そこから新たな価値観や方法論が提唱され続けています。その刺激を受けることは、大いにぼくらを鼓舞してくれるのです。

フランス発の知的潮流に触れるには、とにかくフランス語を読みこなす力が必要です。その力の涵養には、文学作品に親しむのが最良の道なのです。そもそも、哲学も批評も全部、文学の一部をなすのがフランス的伝統であり、文学はフランス文化の基盤です。仏文科とは徹底して、その文学と具体的に向き合い、ことばを読み解く体験を積み重ねていく場所です。地味で、オーソドックスな学習法ですが、しかしそれこそが将来の可能性を切り開いてくれる王道なのだとはぼくは信じています。

しかも文学は、決して文学のみに閉じたものではありません。歴史、芸術、映画といったさまざまな領域との豊かなつながりの上に、フランス文学は花開いています。詩や小説を熟読することが、そうした諸分野への意識を高め、さらなる冒険へのきっかけを作ってくれるのです。伝統的に、仏文科の人間は文学も映画も音楽も愛する、といった貪欲なタイプの「すきもの」が多いのは、理由ないことはありません。同時に、ラブレール『ガルガンチュア』に出てくる名句のごとく、「汝の欲するところをなせ」という自由放任、自主独立の気風がいまなお、仏文科にはみなぎっています。

外国人教員による授業も増えて、実践的な語学力増強のための授業も以前よりぐっと充実しています。フランス語という鍵を使って世界を読み解き、味わいたいと願う人はぜひ、仏文の門を叩いてみてください。

